

第 12 回大和川流域委員会 議事録

開催日時：平成 19 年 2 月 23 日(金)13:00～15:35

場所：王寺町地域交流センター リーベルホール

委員出席数：出席 15 名、欠席 2 名（荻野委員、千田委員）

1．議事経緯

(1) 第 11 回大和川流域委員会審議報告

第 11 回大和川流域委員会審議報告がなされた。

(2) 河川整備計画に向けた大和川の取り組みについて

河川管理者より、大和川再生に向けた取り組み、河川整備計画と C プロジェクト計画 2006 の関係、C プロジェクト計画 2006 の概要、河川整備計画原案の叩き台に関する河川管理者の作業状況について、説明がなされた。

C プロジェクト計画及び河川整備計画との関連等に対する主な意見、質問は以下のとおり。亀の瀬地すべり対策の概成目標が平成 21 年と聞いたが、C プロジェクト計画のどこに記載があるのか。

3 ページに「亀の瀬地すべり対策の早期完成」と記載しており、現場としては平成 21 年度に現在計画されている工事を完成させることを目指している。概成の判断については、学識者のご意見を伺い行っていくことになる。

大和川再生に向けた取り組みの中に「100 万人の一斉清掃」とあるが、流域人口の約半数が参加することになり、そういう状況を作っていくための体制、準備についてどのようなことを考えているのか。

100 万人という数字は象徴的な意味合いである。氾濫域を含めると 400 万人の方がおられる。色々な方に呼びかけて、少しの時間でも実行してもらえるようなことを、これから 3 年間で展開していきたいと考えている。まずは、3 月 4 日のクリーン作戦で大阪から上流の奈良や海へも広げていきたい。

「河川整備計画の原案の叩き台」に関して事務所内でワーキンググループを作って議論を進めている様だが、大和川流域委員会の議論をふまえた修正状況を説明して頂きたい。出来るものなら私達も協力はしていく。

C プロジェクト計画に重点をおいたため、「河川整備計画の原案の叩き台」については作業が進んでいない状況である。今後、所内ワーキングを機能させ、府県とも協議し、また流域委員会でアドバイスを頂きながら作業を進めていく。

「大和川再生に向けた取り組み」の資料に「平成 20 年度が裴世清来朝 1400 年」という記載があるが、実際どの様な取り組みがされているのか。

夢の部分と現実的な部分があり、夢の部分では、裴世清にゆかりの方が大和川を上って海石榴市へ行くような気運をこれから盛り上げていきたいと思っている。ただ、水量など課題がいろいろあるので、現実的な部分として、ゴムボートで下流部の調査を行った。大和さくらい万葉まつりなどの取組もあるので、地元とも意見交換を行い検討していきたい。

裴世清が難波津に到着してから海石榴市までをどういうふうにして上がったかということは、まだ少し議論すべきだと思うので、資料的な確認などをお願いしたい。江戸時代においては亀の瀬区間は船の通行は難しかったし、まして古代であれば、さらに難しかったと思う。

歴史についてはいろいろな見解がある。大和川の学会の様な研究発表の場を設けるなどして、専門家の先生方にご指導を仰ぐことも一つの方法だと考えている。

教育や文化・歴史にきちんと光を当てながら市民や子供たちとともに活動し、教育・研究分野の活性化を図っていくということも、しっかり位置付けてもらいたい。「100万人の一斉清掃」については、清掃だけで川がきれいになるとは思えない。企業の生産のところから含めてゴミを減らすことや、ゴミを捨てないというモラルの問題などを提起すべきだと思う。

大和川は人の生活をよく映し出す鏡だと思う。普通の川だと三尺流れて清くなるようなところも、大和川では周りに多くの発生源があるので、少し汚すとものごく汚くなる。そのハンディキャップを踏まえて、大和川に優しい、大和川に合わせたライフスタイルづくりを見据え、清掃や生活排水対策に取り組んでいきたいと思っている。

住吉大社のお渡りのような、地域の行事との連携といったことは、Cプロジェクト計画の中ではどの項目にあたるかと考えたらいいか。

「歴史的、文化的背景等に考慮した地域の財産としての大和川らしい河川景観の形成」や「次世代に伝える美しい大和川の再生に向けた、大和川の歴史文化の探求」などが該当する。子どもたちへの副読本をぜひ再発行して頂きたい。今の大和川再生の取り組みが加速している内容を盛り込んで発行して頂きたい。

Cプロジェクト計画の中で、もう少し明確に記述していきたい。

大和川は歴史的に色々なものが残っている古い川であるが、そういうことを研究されている方はたくさんいるのか。

大和川そのものについてはではないが、漁梁船の運行状況や亀の瀬の複雑な変遷については、これまでもよく研究されている。

大和川の歴史的な部分は、力を入れるべきポイントだと考えている。例えばそこへ行けば、大和川の博物誌のような資料があるとか、歴史家の方々を紹介して頂けるとか、流域住民と行政、学識経験者等との連携、協働、交流といった、横のつながりも含めたネットワークの輪が相乗的に広がるような仕組みを考えていきたい。

Cプロジェクト計画では、水質に関して数値目標が上げられているようだが、これまでの流域委員会の中での水質の議論とどのように関係しているのか説明して頂きたい。

Cプロジェクト計画で設定している「期待される水質」は、環境基準のレベルを大きく前進させたものとなっている。現在の環境基準は、大和川の状況が非常に劣悪だったころ指定されたものであり、大和川といえども環境基準を見直すべきだという議論をしたいと考え設定したものである。水質はBODだけでなく色々なものがあるが、ここでは目標として象徴的に扱っている。色々な検討の中で環境基準を変えろということも視野に入れて河川整備計画につなげていきたいと思っている。

大和川が汚れた理由や大和川が持っている背景を踏まえて、もう少し大和川だけでしかやれないことで、「よその川が見習うような川」というのはナンセンスなことだと思う。大和川の水質や景観を改善していくには大和川をもう少し違う角度から見直さないといけない。流域委員会で議論が必要なことは、大和川ではどれくらいのゴミが出るか、他の川に比べてどう違うのか、ゴミの背景にある社会構造を明らかにする事である。みんなでゴミ拾いのイベントをすれば良いというようなことは委員会で議論することではないと思う。

データや汚濁のメカニズム、機構といったところに踏み込んだ考察をして、この委員会に示す必要があるという点については、そのとおりであると思う。頂いたご意見について、これから本格的に詰めた議論をしなければいけないと考えている。

昨年9月22日の全国同時記者発表資料の中に、新しい水質指標による評価には、例えばゴミが少ないやにおいが不快でないなどがある。この項目には従前よりモニター制度もあったか

と思うが、現在この制度はどうなっているのか。

モニター制度については、毎年募集しており、現在も抽選で選ばれた5名の方にやって頂いている。

5名というモニター人数は、流域をフォローするには色々な方法があると思うが、大和川流域で5名というのは少ないように感じる。

我々も毎日巡視しており、それらとの連携もあるなか、河川愛護モニターは5名程度で続けてきた。ただ人数が増えれば良いというものでもなく、いろいろな視点というのも重要だと考える。ホームページへの通報も1つのモニターと言えるかもしれない。

水質について目標値を定めるだけではなく、その目標値が何によって検証できるのかが重要である。大和川の生態学的な問題は、フナがいないということである。大和郡山を中心とした一帯は、金魚の国、フナの国であり、アユは大和川の看板ではない。フナのいる川を大和川に戻すためにどうしたらよいか、田と川をどのようにしてつなぐのかをきっちりと目標を立てて考えることが重要である。大和川のワーストワンから逃れることは難しい。なぜなら何処の川もそれを目標にしているから。今のワーストワンでは測れない別の目標を立てることがいいと思う。それはフナやカマツカの川であって、アユの川では決してないことを提案することだろう。

田と川をどのようにつなぐのかといった問題によろやく目を向け始めるようになったところである。調査は始めているし、魚道整備や樋門の段差解消など、魚のすみやすさや連続性について考えている。

流域委員会はある程度長いスパンを扱っている。そのパーツとしてCプロジェクト計画があり、それが将来の河川整備計画に結びついていくというような視点で各委員のお話を承りたい。

例えば写真やアニメを使うなどして、もう少し一般にもわかりやすい水質目標は設定できないだろうか。BODだけではなく、景観が含まれた水質目標が良いのではないか。また、Cプロジェクト計画のアンモニア性窒素の記述だけが他の指標と異なり「豊かな生態系確保」となっている。他のところでは特に記述されていないのに、アンモニア性窒素を0.5以下にすると豊かな生態系確保につながると誤解される可能性があるので、少し説明が必要ではないか。

Cプロジェクト計画ですべてが解決できるとは思ってはいない。並行して河川整備計画を立てていく中で、さらに踏み込んでいきたい。

こういうことから始めていかなければならないのが大和川の現実であるという側面があるという気がする。

多種多様な動植物が生息・生育できる河川環境の保全の取り組みをするというときに、群落や植生の見方ができるところが少ない。河川植生に関しては、多自然型川づくりの推進しか記述がない。多自然型川づくりに際しては、攪乱・変動や河川形態の評価をし、本来成立すべき植生を評価して、河川の中だけでなく、河川植生に戻すところにも力を貸して頂けたらと思う。

Cプロジェクト計画の「大和川らしい景観の創出」ということが書かれているが、実際は堤防沿いの道は車が走っており、なかなか安心して歩けない。堤防の上を川と周りの空間や景観を楽しみながら川風に吹かれて歩く、そういう楽しみを知ってもらえるような工夫も一つ必要だと思う。

地域からは堤防を拡幅して車道整備をしてもらいたいという要望もある箇所だが、川の堤防

からは景観を楽しめるようにしたいところである。しかし、一度占用となると難しい現状である。王寺町や斑鳩町の一部では歩道的なものできており、その視点を盛り込んでいければと思う。

河川整備計画では、その点にも十分配慮してもらいたい。

景観というのは状況によって変わるのが本来の景観であり、場所、場所の特性が写し出された姿である。また、親水空間整備で過度な整備をすると、本来の自然味ある川の表情が台無しになるので、人間が歩くべきところと、人間が近寄ってはいけないところを見極めながら、河川景観を考えていければと思う。

各委員から、Cプロジェクト計画だけではなく流域委員会で検討すべき河川整備計画についても意見が出ている。河川整備計画そのものの作業は若干遅れ気味とはあるが、そのベースとなる河川整備基本方針の進捗状況について報告して頂きたい。

現在、本省の担当部局と基本方針に関わる作業をしながら、適宜協議をしている段階である。河川整備基本方針検討小委員会の進捗状況に注目する必要があるが、今後のスケジュールについて教えて頂きたい。

年度が変わった段階で、それまで進めてきたことをまとめて報告したい。

検討の進捗状況にもよるので、次回開催を具体的に何月とまでは至っていない状況だと思う。

Cプロジェクト計画を初めて見たが、この流域委員会と連携していないと思え、それが将来の大和川の河川整備計画の中でどういう位置付けになるのか心配である。Cプロジェクト計画が、河川整備計画と整合して進めていくことは非常に大事なことである。

私もその点は非常に心配である。このCプロジェクト計画と河川整備計画が矛盾を来すことはないようにしてもらいたい。

Cプロジェクト計画は、3年間での取り組みや取り組みの一部が盛り込まれたととらえている。水質、景観、歴史などの内容の具体化について疑念が多々あったと思うので、本日のご意見を踏まえ、これから良い計画づくりをしていきたいと思う。

2. その他

第13回流域委員会は、庶務から連絡を入れ日程調整を行うことが報告された。

以上